

(2) 各学系の研究

① 学校教育学系

ア 研究の特色

学校教育学系は教育学，教育実践研究を中核としており，教員養成大学としての本学の教育・研究の根幹を成す研究領域を，幅広く担っている。全学的な教職必修科目を担当する教員も多く，学内において大人数講義を担当しながら，国・地方自治体，地域社会，学校等に至る，全国の教員研修や講演会の講師も数多く手がけており，学術研究にとどまらず，広く学校現場に開かれた実践的・臨床的な視点を携えながら，研究活動に取り組んでいるところが大きな特色といえる。専門職学位課程の教員は，学部生・大学院生の指導や地域の学校に対する支援活動を行うとともに，全国の研究会講師や実践研究の取組をリードしている。また，連合博士課程においては，学校教育方法連合講座，先端課題実践開発連合講座を中心に，各講座で活発な教育研究活動を推進している。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系は，修士課程と専門職学位課程の教員による，多方面での教育・研究，学会における研究発表と論文の投稿，著書の発行，学外においては，国・地方自治体，地域社会，学校等に至る各種の研修会・講演会の講師や公開講座，出前講座の講師等で成果を挙げている。

そうした中で，本年度は次の8件の学内研究プロジェクトが実施された（新規3件・継続5件）。（新規分）

- ・いじめ問題への対応の充実を図る道徳科授業の開発とその普及～いじめ防止に関わる役割演技を用いた道徳授業の開発と，指導者用ビデオの作成を通して～（特別研究）
- ・グローバルな教師教育課題と地域の教育ニーズを共に反映させる大学—地方教育行政のコミュニケーション・チャンネル構築に関する研究—教員育成協議会の基盤となる連携システムへ向けた一試論—（一般研究）
- ・地場産業を活用したキャリア教育実践における越境的学習（若手研究）（継続分）
- ・発達支援体制をもつ幼保小接続プログラムの開発に関する実践的研究（特別研究）
- ・大学における教育経営職育成の国際共同開発（特別研究）
- ・ICTを活用したアクティブ・ラーニング型講義への移行・適応プログラムの開発（一般研究）
- ・附属幼稚園の預かり保育についてのプロジェクト評価研究（一般研究）
- ・新しい連携・協働による教員研修の開発と評価；大学の強みをいかした実践と研究の接近（一般研究）

② 臨床・健康教育学系

ア 研究の特色

本学系では、臨床心理学に基づいたいじめ、不登校、ひきこもり、発達障害、児童虐待、PTSDなどのこころの問題の解決に向けた研究、特別支援教育の基礎理論、各種障害（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱、情緒障害、言語障害、重複障害、発達障害）の心理・生理学、診断法、指導法に関する研究、学校健康教育学、医科学、養護学等に基づいた学校における健康教育に関する研究が行われている。心理教育相談室、特別支援教育実践研究センターをはじめとする臨床研究の場において、いずれのコース・科目群も学校における喫緊の課題に対応するための臨床的、実践的研究を展開している。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系では、心理教育相談室、特別支援教育実践研究センター及び地域の学校等において多様な臨床研究が展開されており、これらの成果は、関連学会や大学紀要の他、『上越教育大学心理教育相談研究』や『上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要』においても公表されている。また、学校及び地域社会を含めた健康教育（学校安全、学校保健）や健康課題への対応に関する研究も盛んに行われている。

このような研究活動の一環として、今年度は次の3件の学内研究プロジェクトが実施された。

- ・小・中学校通常の学級に在籍する発達障害のある児童生徒のアクティブ・ラーニングを支える自立活動のカリキュラム開発に関する基礎的研究
- ・特別な教育的ニーズのある児童を含む小集団活動場面を活用した学習支援方法の開発
- ・特別な支援が必要な児童生徒への合理的配慮の提供に関する学校のチーム力を高めるための研究・研修の内容と方法について

このように、本学系の構成員は、それぞれの領域の専門性を活かして、学内のみならず地域においても活発に研究活動を継続している。臨床心理学コースにおける公認心理師及び臨床心理士の資格取得に向けた対応や、特別支援教育コースにおける6年一貫プログラムの策定・実施、学校ヘルスケア科目群における保健管理センターとの連携強化など、本学系の特色を活かした教育・研究活動の更なる発展が期待されており、それらの実現に向けた教員スタッフの充実が急務となっている。

③ 人文・社会教育学系

ア 研究の特色

人文・社会教育学系に属する主な研究領域は、国語学、国文学、国語科教育、書写書道、英語学、英語科教育、小学校英語教育、異文化コミュニケーション、歴史学、地理学、地誌学、法律学、経済学、社会学、宗教学、社会科教育、と多岐にわたっている。

こうした研究領域における研究活動を推進するため、本学系の教員と多数の卒業生、修了生が所属する「上越教育大学国語教育学会」、「上越英語教育学会」、「上越教育大学社会科教育学会」の3学会が組織・運営されており、活発な活動がなされている。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

人文・社会教育学系に属する主な研究領域は、国語学、国文学、国語科教育、書写書道、英語学、英語科教育、小学校英語教育、異文化コミュニケーション、歴史学、地理学、地誌学、法律学、経済学、社会学、宗教学、社会科教育、と多岐にわたっている。

こうした研究領域における研究活動を推進するため、本学系の教員と多数の卒業生、修了生が所属する「上越教育大学国語教育学会」、「上越英語教育学会」、「上越教育大学社会科教育学会」の3学会が組織・運営されており、活発な活動がなされている。

④ 自然・生活教育学系

ア 研究の特色

自然・生活教育学系は、数学、理科、技術、家庭科の4つの専門分野の教員によって構成されている。数学の分野では、7月22日に「数学教室修士会」と称して数学並びに数学教育の講演会を開催し、数学教室教員ならびに大学院学生の研修を行った。また、「上越数学教育研究」33号を刊行し、教員ならびに大学院修了院生等の研究論文を掲載した。継続して算数・数学の授業に直結した教育研究を行っている。宮川健准教授（数学教育学）が科学研究費補助金で1年間在外出張中である。29年度～30年度学内研究プロジェクトに、中学校の文字式の学習と図形の証明学習とで形成される子どものアイデンティティと認知的学力の様態（代表 高橋 等）、グローバル教員育成のためのプロジェクト型国際交流プログラムにおける学生の学び（代表 宮川健）が採択された。

理科の分野では、「超短パルスレーザーを用いた固体の超高速分光の研究」、「主として電波による星間物質の観測に基づいた銀河と星の形成と進化の研究」、「植物の環境応答特性や生活史特性に関する研究」などの専門研究を行うとともに、物理学、化学、生物学、地学の専門家が「それぞれの分野における教材開発」などを行うなど、専門性を背景とした教材研究を行っている。さらに、理科教育の専門家は「仮説設定の方法論」など、理科教育の現代的課題にも取り組んでいる。また、物理学、化学、生物学、地学、理科教育の専門家が理科における21世紀を生き抜くための能力に関して執筆し、その成果物が「思考力」を育てる ― 上越教育大学からの提言1―、「実践力」を育てる ― 上越教育大学からの提言2―、「思考力」が育つ教員養成 ― 上越教育大学からの提言3―、「実践力」が育つ教員養成 ― 上越教育大学からの提言4―の理科に関連する項目として出版された。

技術の分野では、メカトロニクス教材の開発を中心としたエネルギー変換技術の研究や、情報ネットワークやICTに関する技術、特に、学外活動として小・中学生を対象にプログラミングの学習指導・実践もっており、学校現場の課題に対応した取組も積極的に行っている。また、木材加工や加工材料に関する専門的研究を行うとともに、全員が専門性を背景とした教材研究を行っている。教科教育研究では技術教育課程開発や技術教材の機能に関する研究を中心に技術科教育の現代的課題を見据えた教育研究を行っている。平成29年度は、日本産業技術教育学会北陸支部事務局として、第25回北陸支部大会を上越で開催した。この支部大会では、初めて「研究発表奨励賞」を設置し、今後のますますの技術教育に関する研究と北陸支部の発展を図った。

家庭科の分野では、地域貢献としては、「地域素材を授業にいかすためのワークショップ」のテーマのもと、「生活と手仕事を考える家庭科」と題した3つの事業（「天野寛子氏 フリー刺繍展」、公開シンポジウム「布に触れ、布に関わり子どもは何を感じ、何を刻むのか - 家庭科の授業で〈つくる〉のこれからを考える -」、ワークショップ「フリー刺繍〈私の街〉をつくる」）を実施した。昨年の地域貢献事業を発展させ、2つの公開研究会を実施した。研究会1は「ロボットが〈ある・いる〉社会を共に生きていく子どもたちの教育を考える -AIを搭載しない分身ロボット「OriHime」開発者吉藤健太郎氏から学ぶ -」である。吉藤氏の講演に続き、吉藤氏と川崎直哉学長、林泰成副学長によるトークセッションを行った。研究会2は「どうしたら子どもの日常生活に寄り添った教育・支援・研究ができるのだろうか」である。2015年Googleインパクトチャレンジにおけるグランプリ等を受賞した伊藤史人氏（島根大学助教）を講師に招き、子どもの日常生活に寄り添った教育・支援・研究について皆で考える機会とした。上越市自治・市民環境部文化振興課が主催する地域の偉人坂口謹一郎博士の生誕120周年記念事業に実行委員として参画し、記念フォーラム等の開催に直接携わった。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系に所属する教員の研究業績の中には、毎年、国際誌へ採録された論文が多数あり、国際的に活躍している研究者が複数いることは本学系の特筆すべきことである。委員会や書類作成等々で業務が多忙化するなか、学術研究の成果を発信し続けられる研究環境をいかに創出していくかが今後の大きな課題である。

⑤ 芸術・体育教育学系

ア 研究の特色

芸術・体育教育学系に所属する教員の主な研究領域は、声楽、器楽、作曲、音楽学、音楽科教育、絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術理論・美術史、美術教育学、体育学、運動学、学校保健学、体育科教育学といった音楽、美術、保健体育の教科に関連した基礎的及び応用的な研究領域からなる。また、これらの領域は実技指導や作品・演奏発表に関しても地域社会と密接に関わり、近隣の学校や地域において音楽や美術、スポーツの普及・発展に尽力するとともに、コンクールや競技会において審査員や競技審判等を務めることも多い。平成29年度も音楽、美術では各教員の専門を生かした地域貢献活動が活発に進められたほか、教科や領域を超えた学際的な教育、研究が進められた。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本年度に実施あるいは参画した研究プロジェクトの中で、兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科の共同研究プロジェクトR、でプロジェクト協力者として池川茂樹が関わり特筆すべき研究成果をあげた。その成果報告書は伊藤武彦ら編著「健康教育の理論と実践 ーわが国と外国の事例をもとにー」（公益財団法人 日本学校保健会）として刊行された。また、平成29年度上越教育大学研究プロジェクトとしては「バス利用率が生活習慣病指標に及ぼす影響」（池川茂樹）、「附属幼稚園の預かり保育についてのプロジェクト評価研究」（研究代表者 白神敬介、研究分担者 周東和好、他）などがあり、産学共同研究として「5-ALA摂取と持久性トレーニングの併用が若年者の好気呼吸能に及ぼす影響」（池川茂樹、SBIファーマ株式会社との共同研究）や官学共同研究「地理情報システム（GIS）を用いた生活習慣病予備群の推定に関する研究」（池川茂樹、会津若松市役所との共同研究）を行った。その他に、平成30年2月には保健体育の周東和好が日本赤十字社の銀色有功賞を受賞した。

さらに、科学研究費採択については、「教員養成系大学の「知」を活用した美術館連携モデルの実践的研究」（研究代表者：五十嵐史帆）、「子どもの直観像に関する発達認知神経科学的研究」挑戦的研究（萌芽）（平成29～30年度）（研究代表者 森口佑介〈京都大学〉、研究分担者 安部泰）、「伝統音楽の教授法・学習法とその変化～明治・大正期能楽を中心として」（若手研究(B)、研究代表者、玉村恭）、「能楽及び能楽研究の国際的定位置と新たな参照標準確立のための基盤研究」（基盤研究(B)、研究分担者、玉村恭）、「ダンス教育で育てるからだを問う～ソマティクスとボディ・ワークのかかわりから」（基盤研究(C)、研究分担者 大橋奈希左）に交付がなされた。そのほかに「教科教育カリキュラム構想のための基礎的研究 ー『21世紀を生き抜くための能力』の『思考力』と教科固有の見方・考え方の観点からー」（研究代表者：小林辰至 分担者：阿部靖子 周東和好 土田了輔 ほかに17人）等、学系所属の教員により活発に研究が進められた。